

元プロ車いすテニス選手

国枝慎吾

KUNIEDA Shingo

車いすテニスの絶対王者と称され、世界ランキング一位ながら二〇二三年一月に現役を退いた国枝慎吾さん。通算五〇回のグランドスラム優勝を誇り、パラリンピックでは北京・ロンドン・東京の三大会でシングルス金メダルを獲得。まさに勝ち続けることで車いすテニスを世に知らしめた競技人生だったが、その過程では資金難やケガなど何度も困難に直面し、その度に強い意志で乗り越えてきた。その知られざるエピソードの数々を語っていただいた。

【グラندスラム】

国際テニス連盟 (ITF) が公認する
世界最高峰のテニス大会。

「俺は最強だ」で切り開いた 車いすテニスの未来

少年時代に勇気をもらった 車いすテニスプレーヤーの自立した姿

——国枝さんは野球少年だった
と伺っています。

国枝 父も野球が好きで、よくキャッチボールしたのを覚えています。母はテニスに興味で、今も楽しんでますね。そんな両親の影響でしょう、僕も大会とかでがんばるタイプでしたし、とにかく負けず嫌いでした。

——活発に過ごされていた中で病に襲われ、もう走り回ることはできないと告げられた。そのときに受けられたショックは、察するに余りありません。

国枝 野球をやめなければいけない。まずそのことがショックでした。それに、まだ小学四年

生だったので、車いすの生活になると何がどう変わるのか、想像できませんでした。

でも、友だちには恵まれたと思います。放課後は毎日のように遊びに来てくれたんです。両親が自宅の近くにバスケットボールのリングを設置してくれて、僕は車いすで友だちに混じり、『スラムダンク』の真似をしながら「3 on 3」(スリー・オン・スリー)で遊ぶという日々が続きました。辛い時期だったはずなのに、振り返ると楽しい思い出しかないんです。

——どのように車いすテニスと出会ったのでしょうか。

国枝 一番やりたかったバスケットは、車いすのチームが自宅から約二時間もかかるところにしかなかった。その時、母がテニス仲間から「車いすテニスの選手も在籍しているスクールが近くにある」と聞いてきたんです。その吉田記念テニス研修センター(以下、TTC)は、車いすテニスのレッスンを行的っており、国内トップクラスの選手もトレーニングをしていました。世界ランキング一〇位前後の齋田悟司選手も、TTCが練習拠点でした。そういう場所が家から三〇分の距離にあったことは運命だったなと感じます。

ただ、最初は本当に行きたくなくて。テニスに興味はなかったし、僕自身、車いすだけれども、同じ車いすの人と接するの

が初めてだったので、ちょっとビビっている気持ちもありました。ところが、行ってみたら想像と全然違ってました。車いすの先輩方は自分で運転してTTCまで通ってくる。ひとりで暮らしているし、彼女だっている。そういう姿を目にして、僕は子ども心に勇気が湧いたことを覚えています。TTCでテニスに出会ったことよりも、実はそのことのほうが国枝少年にとって重要だったと思います。

——車いすテニスという競技についてはどう感じられましたか。

国枝 母が見るのは当時全盛期だった伊達公子さんの試合ばかり。テニスは、僕の中では女性がやるスポーツかなという認識でした。ずっと野球をやっていた巨人の試合ばかり見ていた僕からすると、あまりやりたくないなと……。

——ただ実際に見たらすごく激しいスポーツで、これだけ激しいのに動かし、ラリーの応酬をする……、思っていた以上のパフォーマンスでした。



くにえだ・しんご●1984年生まれ、千葉県出身。9歳で脊髄腫瘍のため車いす生活となり、11歳から千葉県柏市の吉田記念テニス研修センター（TTC）で車いすテニスを始める。2001年から海外ツアーに参戦し、06年10月に男子シングルスでアジア人初の世界ランキング1位に。07年には車いすテニス史上初となる年間グランドスラムを達成。09年4月、車いすテニス選手として日本初のプロ転向を宣言。10年11月まで続いたシングルス連勝記録は107に達した。グランドスラム車いすテニス部門で歴代最多となる計50回（シングルス28回・ダブルス22回）優勝。パラリンピックでもシングルス3回（北京大会・ロンドン大会・東京大会）、ダブルス1回（アテネ大会）の金メダル。23年1月、世界ランキング1位のまま現役を引退。同年3月に国民栄誉賞を授与された。

——世界を意識したのはいつ頃ですか。

国枝 小・中学生の頃は週一、二回、練習する程度でしたが、高校生になってからレベルが上がって、一年生で初めて海外遠征をしました。そこで世界ナンバーワンの選手のプレーを見た。プロ選手として各国を転戦し、ラケット一本で食べている。あんなふうになりたいと初めて思った瞬間でもありましたね。パラリンピックを具体的に意識し始めたのもこの頃です。

大学に入って、三年生の時に

アテネパラリンピックが開催されるのですが、それを目指して、大学生活の全てをテニスに懸けました。年間四カ月くらいは海外遠征をしていましたね。

——海外遠征には相当お金がかかるのではないですか。

国枝 当時の僕にはお金の余裕がなかったもので、海外遠征にコーチを帯同できず、基本的に一人で試合に臨む状況でした。それでも年間四〇〇万円ほどかかってしまう。そのすべてを両親に頼り切っていました。

わが家は普通のサラリーマン家庭です。もうこれ以上負担を

かけられないし、アテネを戦ったら引退しようと思っていました。日本の車いすテニス選手に企業スポンサーがつくような時代でもありませんでしたし、僕は普通に就職して、そのまま平凡に暮らしていこうと思っていました。

——アテネパラリンピックでは齋田選手とペアを組み、ダブルスの金メダルに輝きました。そこでテニスを続けていけるので

は、と考え直されたのですね。

国枝 はい、そうです。金メダルを獲得したことに価値を見いだしてくれる企業があれば、実業団選手として就職して現役を続けられるかもしれない。そう考えて就職活動をしたところ、大学の就職部から「TTCにも近いし、大学職員として働きなから競技を続けたら」と声をかけていただいたのです。お金の面の心配がクリアされ、正直気持ちすごく楽になりましたね。これでテニスに集中できるように became したのです。

「俺は最強だ」と繰り返しメンタルの弱さを克服する

——アテネの後、二〇〇六年にシングルス世界ランキング一位となり、翌年には当時の車いすテニスの年間グランドスラムを達成しました。〇八年の北京パラリンピックでは念願のシングルス金メダル。まさに絶対王者となりましたが、「やり切った」感はなかったですか。

国枝 ちょっとありましたね。世界一になって「追うべき背中」が見えなくなったというか。そうになると、次は車いすテニス界を発展させるにはどうすればよいただろうかと考えるようになってきました。

——北京パラリンピックの後、日本の車いすテニス選手初のプ

口に転向しました。

国枝 大学の職員としての月収があり、海外ツアーの遠征は出張扱いにしていたら、競技を続けていくための不自由はありませんでした。でも、世界一の選手の生活として若い人が夢を持てるかというと、そうじゃない気がする。車いすテニス選手であっても、夢のある収入を得る必要があると思う始めたんです。

そこで、北京パラリンピックの直前に、世界的なアスリートたちのマネジメントを手がけている会社を自分から訪ねました。今お世話になっている、アメリカに本社を置く会社です。僕は、自分がプロになれるか、車いすテニス選手として価値があるかを知りたかった。プロに転向できたらこういう活動をしていきたいと、自分で資料を作ってプレゼンをしました。それに対して、北京のシングルスで金メダルを取ることが重要だと言われ、僕は「取ったらまた来ます」と返事をして帰ったんです。

北京での金メダルは大きな転機になりました。実際、スポンサーがつきやすくなりましたし、自分自身も北京の優勝がなければ大学職員の辞めるという勇氣はなかったかもしれないです。

——プロ選手になるために大学職員としての安定を捨てたことになりま。

国枝 当然、勝たなければいけないという思いはより強くなり、自分自身に重圧をかけることになりました。ただ、世界で勝ち続けることで国枝という名前が認知され、車いすテニスというスポーツも広く認知されるようになる。そのサイクルが重要だと考えていました。勝つことに、とことんこだわるようになっていったんです。

——しかし、プロになってから順風満帆というわけではなく、ロンドンでのパラリンピックの前には右ひじを手術されました。それでも、シングルス金メダルを獲得されましたが、その後、右ひじの痛みが再発します。困難を乗り越えた原動力は何だったのでしょうか。

国枝 東京パラリンピックです。その開催が二〇一三年に決まっていたなかったら、もっと早くやめていたと思います。

それまで勝ち続けてきたのにケガを機に勝てなくなると、リオのシングルスは準々決勝で敗退し、挫折を味わいました。だけど、ここでやめるわけにはいかないという気持ちがあったのは、四年後に東京があるから。リオでは相手に負けたのではなく、自分自身に負けたのだ、ケ

ガにやられたんだと。東京でも一度優勝して、それを証明したいという思いもあったんです。東京パラリンピックに向けた練習では、すべてのことを変えました。車いす、ラケット、コーチ……それだけ変えることは、王者はなかなかできません。過去の成功体験が邪魔をするからです。でも僕は新しい自分になったんです。

——ケガの逆境を乗り越えるだ



東京パラリンピックにて男子シングルス優勝を取めた国枝氏
(写真提供：共同通信社)

けでなく、国枝さんは試合でも印象的な逆転勝ちが何度もありました。メンタルはどうやって鍛えたのでしょうか。

国枝 メンタルトレーニングは二〇〇六年から導入しましたが、それで心が強くなったかというところ、そうでもなかったと思います。

試合前はいつもビビっていたんです。東京パラリンピックの

プロとして勝ち続けることで 車いすテニスの未来を開いた

——そうして迎えるはずだった東京パラリンピックが新型コロナウイルスで一年延期となりました。

国枝 しんどかったですね。

ちょうど二〇二〇年はすごく調子がよかったですよ。全豪オープンで優勝して、本来であれば東京パラリンピックの時期に行われた全米オープンでも優勝しました。ところが、二一年になってからは腰が痛くなってしまっ、東京パラリンピックまでの間に一度も優勝できな

前は、とくに怖かった。それをいかに振り払うか。僕の場合、試合前は鏡に向かい「俺は最強だ」と、身体の震えが収まるまで言い続けましたし、試合中はルーティンワークを必ず実行するようにしました。本当の僕の心は弱けれども、いろいろなスキルを駆使して弱気の自分を抑え込み、強気な自分に変えていたわけです。

—— かつたんです。コルセットをしながら試合をするような状態だったので、これは持つてなかつたな、仕方ないなと一度は諦めました。ところが、いざパラリンピックを迎えたら、腰が痛くなくなつたんですよ、有明に入った瞬間に。八年越しの夢が詰まった思いが通じたのかなと思います。

—— 決勝戦の強さは圧倒的でした。

国枝 その間だけ二〇代に戻つ

たかのようなエネルギーがあるな、こんなに疲れないのは久しぶりだなと試合をしながら思いました。終わった瞬間はほっとすると同時に、今回だけはやり切った感が強かったですね。あんなに幸せなことはなかったです。

—— 東京パラリンピックの翌年には、ウインブルドン選手権で初優勝。そして世界一位のまま現役引退を表明されました。もつたいないという気もしてしまいます。

国枝 東京パラリンピックの後も現役を続けたのは、ウインブルドンがまだ残っていたからですが、続けるか本当に悩みました。もう十分だと、毎日引退しようと思っていました。ウインブルドンの決勝戦に勝った瞬間も、チームメンバーと抱き合いながら、もうこれで引退だなとぼろっと本音が出ました。

東京パラリンピックは無観客の開催で、そこは残念でしたが、車いすテニスの魅力はテレビを通して多くの方々に伝わったと感じました。プロ転向以来、

この競技を知ってもらうために勝たなきゃ勝たなきゃと思ってやってきた。その思いに東京で決着がついたという満足感が、最終的には引退の決意に導いたのだと思います。後輩たちに、車いすテニスで賞金を稼いで生活していけるという道筋を残せたことも胸を張れると思います。

—— 引退されて、今後はどんなことをしようとお考えですか。

国枝 それはまだ見えてこない、ゆっくり考えていますが、どうしましょうか。二〇年以上、ツアー生活をずっとしてきて、アスリートは目標を立てやすいところは楽だなと思うんです。何月何日に試合、次は何月何日と、目標がどんどんやってくる。目標のある人生の充実感を僕は知っていますので、今後同じような人生を求めてしまうところはありますね。テニスに代わる何かが見つかれば、また僕の人生は面白くなるなど。

—— 国枝さんの今後の活躍も楽しみにしております。本日は、ありがとうございました。

(聞き手/情報サービス局長・小牧義弘)